慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	モーリス・ド・ゲラン『ル・サントール』（翻訳）
Sub Title	Maurice de Guérin, Le Centaure (traduction)
Author	Guérin, Maurice de(Kanazawa, Tetsuo) 金澤, 哲夫
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.45 (2007. 9) ,p.98（21)- 118（1）
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20070930-0098

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

モーリス・ド・ゲラン『ル・サントール』[1]（翻訳）

金澤哲夫訳

私はこの山々の洞穴の中で生を享けた。ある深い洞窟の中に涙する何らかの岩から始原の滴りが流れ出すこの谷の河のように、私の生の最初の一瞬はある奥まった住み処の暗闇の中に落ちたが、その静寂を乱しはしなかった。我々の母親たちは、分娩が近づくと岩穴の方へと遠ざかり、最も未開の奥処、最も濃い影の中で、呻き声一つ上げることもなく、彼女ら自身同様に寡黙な果実を産み落とす。

彼女たちの強壮な乳のおかげで、私たちは衰弱することもなく覚束無い闘いをすることもなく、生の最初の困難を乗り越えることができる。しかしながら私たちは、君たちが揺籃から出るよりも遅く私たちの岩穴を出る。それというのも、存在の最初の時期は、神々によって満たされた日々のように掠め取り、包み込まなければならないと私たちのうちでは広く伝わっているからである。私の成長はほとんど全過程が、私の生まれた闇の中で過ぎていった。私の住み処の奥は山の中のずいぶん深くにまで達していたので、この開口部で時折向きを変える風がそこに冷気や突然の乱れを投げつけるのでなかったら、私は出口がどちら側にあるのかも知らずにいたことだろう。また時々、私の母は、谷の薫りに取り巻かれて、あるいは足繁く訪れる波にしとどに濡れて戻っ

て来た。ところで、母は谷についても河についても決して私に教えてくれずに、それらの場所から発する香気を従えて帰って来るので、その度に私は心穏かではいられずに、ひどく興奮して闇の中を動き回るのだった。それはどんな所なのだろうか、と私は考えていた、母が駆け巡るあの外の世界は、そしてどんな強力なものがそこには君臨していて母をこんなにも頻繁に呼び寄せるのだろうか？　いったい母が毎日様々に心を揺り動かされて帰って来るほどまでに相反する何がそこには感じられるのだろうか？　母は戻って来た、ある時は深い喜びに活気づいて、ある時は悲しく、体を引き摺り、まるで傷ついているかのように。母が持ち帰る喜びは、彼女の歩みの幾つかの特徴の中に遠くからでも示されていて、彼女の目差から散りこぼれていた。その喜びを私は胸一杯に受け止めていたのだが、彼女の意気消沈はなお一層私に伝わり、私は私の精神が向かう色々な憶測に更に一段と引き摺り込まれていった。そのような時には、私は自分の力に不安を抱き、孤独なままではいられないある能力を私はそこに認めていた、そして急に腕を揺り動かし始めたり、あるいは岩穴の広々とした闇の中で繰り返し疾駆し始めたりして、私は、空洞を打ち続けるうちに、そして夢中になってそこに歩みを進めることによって、いったい何に向かって私の腕が伸び、私の足が私を運んで行くことになるのか見つけ出そうと努めていた……それ以来、私はサントールたちの上半身の回りに、英雄たちの体の回りに、そして小楢の幹の回りに両腕を絡み付けた。私の両手は岩山を、水辺を、無数の草木を、そして空気のごく微妙な印象を試してみた、というのは私は両手を盲目の静穏な夜の中に差し上げて、風のそよぎを不意に捉えては私の行くべき道を占うための徴をそれから導き出そうとするからである。私の足は、ごらん、おお、メランプ[2]よ！どんなに擦り切れていることか！　しかしながら、こうして年齢を重ねてきた末に私はまさに凍り付いているのだが、時には、山頂で日差しを一杯に浴びて、岩穴の中でのあの青年期の疾走を身を奮い起こすようにしてやってみる、それもかつてと変わらぬ意図のもとに、両腕を振り上げ、私にまだ残っている速力をすべて駆使する、そんな日々もある。

そのような混乱が、あらゆる不安な動きの長期間の不在と交互にやって来ていた。それ以来、私は私の全存在のうちに、成長についての、そして私の胸に沸き上がる生の諸段階についての感覚以外の感覚をもはや持っていなかった。熱狂への愛を失ってしまい、絶対的な休息のうちに引きこもって、私は私のうちに広がる神々の恩恵を激しい渇きもなく味わっていた。静寂と影が生命感の密かな魅力を司る。この山々の岩穴に棲む影たちよ、私はお前たちの静かな配慮のおかげで秘密裡の教育にかくも力強く育まれ、そしてお前たちの庇護のもとに、神々の胸から私へと溢れ出てくるがままのごく純粋な生を味わうことができたのだ！　私がお前たちの隠れ処を出て日の光の中へと下った時、私はよろめき、光に挨拶をしなかった、なぜなら光は激しく私を捕えて、あたかも不吉なリキュール酒が私の胸に突然注がれたかのように私を酔わせたから。そして私は、それまでとても堅固でとても単純だった私の存在が動揺してその多くを失うのを感じるのだった、まるでそれが風に四散しようとしていたかのように。

おお、メランプよ！サントールたちの生活を君は知りたがっているが、神々のいかなる意思によって君は、あらゆるサントールたちのうちで最も年老い最も悲しい私の方へと導かれて来たのだろうか？　既に長い間、私は彼らのような生をもはやいささかも営んでいない。年齢のために閉じこめられたこの山頂を私が去ることはもはやない。私のどの矢の先端も、頑固な草木を根こそぎにすることにしかもう役立ってくれない。穏やかな湖たちは私をまだ知っている、だがいずれの河も私を忘れてしまった。私は君に私の青春の何点かについて語ろう。しかしこれらの思い出は劣化した記憶に由来するもので、傷んだ甕から吝嗇な神酒の波のようにこぼれ落ちて地を這う。私は君に私の最初の歳月については容易に述べた、なぜなら穏やかで完璧な歳月だったから。孤独で単純な生が私を潤していたのであり、それは記憶に留まり苦もなく暗誦される。神ならば、その生を語るよう懇願されれば、わずか二言に要約するだろうが、おお、メランプよ！

私の青春は速やかに費やされ、動揺に満ちていた。私は運動を糧に生きていて、歩みに限界を知らなかった。自分の自由な力を誇るままに私はさ迷い、この荒漠たる土地の至る所に足を運んだ。ある日、サントールたちのめったに分け入らない谷を辿っていた時、私は河に沿って向こう岸を進む一人の男を見つけた。私の目に映った最初の人間で、私は彼を軽蔑した。あそこにいるのはたかだか、と私は考えた、私の半分の存在だ！　彼の歩幅はなんと短く、彼の足取りはなんとぎごちないことか！　彼の目は空間を悲しく推し測っているように見える。恐らくあれは神々によって打ち倒されたサントールで、このように体を引き摺らざるをえなくされてしまったのだ。

私はしばしば河床に身を預けて日々の疲れを休めたものだった。私の半身が、水中に隠れて、水を超克しようと動き回る一方で、他の半身は静かに起き上がり、私は私の無為な両腕を波浪のずっと上へと差し出していた。このように波の真ん中に我を忘れて、その流れに引き摺り込まれるままになれば、流れは私を遠くへ連れ去り、波の野蛮な客を岸辺のあらゆる魅力へと導くのであった。幾たび、不意に夜に襲われて、私は広がる闇の下を流れに従い、神々の夜の影響を谷底にまで下ろしたことか！　私の血気にはやる生はその時ずいぶん鎮まって、私の全身に規則正しい拍子とともに広がった私の存在についての軽い感覚しかもはや残っていなかったのだが、それは夜ともなれば駆け巡る女神が、私の泳ぐ水の中で閃く様を思わせた。メランプよ、私の老年は河を惜しむ。大部分は穏やかで単調な河は、サントールたちよりも静かに自らの運命を辿り、人間たちの知恵よりも恵み豊かな知恵に従う。私が河の懐から出てきた時、私は河の賜物を従えていたのだが、それらは何日間もずっと私に付き添い、引き取る時はただただゆっくりと、薫りのように消え去っていった。

ある野蛮で盲目的な無節操が私の歩みを自由に押し進めた。最も乱暴な奔走のさ中に、私は駆歩（ギャロップ）を急に中断することがあった、あたかも深淵が足元に見出されたかのように、あるいはある神が私の前に立ち上がったかのよ

うに。こうした突然の静止によって、私は私の生が私を運ぶ狂奔にすっかり突き動かされているのを感じることができた。かつて私は森で小枝を切り、走りながらそれを頭上に掲げたものだった。奔走の速さのために、葉叢は動きを中断され、軽いそよぎを響かせるのみであったが、ほんの少し休みさえすれば風とざわめきが小枝に帰ってきて、小枝はその呟きの流れを取り戻すのだった。かくして私の生は、これらの谷間を貫いて私が遂行していた猛烈な疾駆を突然に中断した時、私の胸の中一杯に震えていた。私は私の生が煮えたぎりつつ走るのを、そして激しく飛び越えた空間において燃え付いた火を転がすのを聞いていた。私の活気づいた脇腹は内部に押し寄せる生の波と闘っていた、そしてこのような嵐の中で、海の岸辺によってしか知られていない悦楽、絶頂にまで高まり苛立った一つの生をいかなる損失もなく内に閉じ込めることの悦楽を味わっていた。その間も私は、冷気をもたらしてくれる風に頭を傾けて、数瞬のうちに遠のいてしまった山々の頂を、岸辺の木々と河の水を眺めていたが、水は引き摺るような流れに運ばれ、木々は大地の懐のうちに結び付けられて、空気のそよぎに委ねられた枝のみが動いては呻き声を上げていた。「私だけが、と私は考えていた、私こそが自由に動き回れる、そして気の向くままに私の生をこれらの谷の一方の端から他の端へと運んでゆく。私は、山々から流れ落ちたらもうそこに遡ることのない急流よりも幸せだ。転がり進む私の歩みは森の嘆きや波のさざめきよりも美しい。それは、さ迷いながらも自らを導くサントールの高らかな響きなのだ。」かくして、私の揺れ動く脇腹が奔走に酔い痴れている間も、一段と高く私はそれを誇りに感じていた、そして首をねじ曲げてしばし立ち止まり、湯気を立てる私の臀部を見つめるのだった。

青春は、風に責めさいなまれる緑なす森に似ていて、あらゆる方向に生の豊かな贈物を振り撒き、そしてその葉叢の中には常に何か深い呟きが君臨している。河のように気ままに生き、絶えずシベール[3]を熱く追い求め、谷の河床であれ、山々の頂であれ、至る所で私は盲目的で猛り狂った生のように飛び跳ねていた。しかし夜が、

神々の平穏に満ちて、山々の斜面に私を見出した時、夜は岩穴の入口へと私を導き、海のうねりを鎮めるように私を鎮め、私の休息を損なわずに眠りを遠ざける軽い波動を私の中に存続させた。陰棲地の入口に横たわり、脇腹を洞穴の中に隠して頭を空の下に出し、私は影たちが繰り広げる光景を追い続けていた。その時、昼間に私の中に浸透していた外部からの生が私から一滴また一滴と離れ落ちて、シベールの安らかな胸の内に戻っていった、通り雨のあとに葉叢にしがみついていた雨の名残が落ちて河川に再会するように。海の神々は夜の間に彼らの深い宮殿を去り、岬に坐って、視線を波浪の上に伸ばすと言われている。かくして私はまどろむ海に似た一ひろがりの生を足元に、夜を徹して見張っていた。別の満ちた存在に戻された私には、私は生まれたばかりであるように、そして、深くてその懐に私を孕んだ水が、さながらアンフィトリット[4]の波によって漂砂の上に置き忘れられた海豚の如く、私を山の頂に置きざりにしたばかりであるように思われた。

私の視線は自由に走り、最も遠い地点にまで達していた。常に濡れている岸辺のように、西に連なる山々は闇によって十分には拭い取られなかった微光の刻印をなおとどめていた。そこでは、仄かな明かりの中に、裸の清らかな山頂が生き残っていた。そこには、ある時は常に孤独な神パン[5]が、ある時は秘密の神々の一群が下りて来るのが、あるいは、夜に酔い痴れたある山のナンフ[6]が通り過ぎるのが私には見えた。時々オランプ山[7]の鷲たちが空の高みを横切り、遥かな星座群の中に、あるいは天の息吹を浴びる森の下に消えていった。神々の霊気はにわかに活気づいて、古い小楢の静寂を突然かき乱していた。

君は知恵を追い求めている、おお、メランプよ！知恵とは神々の意思についての知識のことだが、そして君は運命に惑わされた一人の死すべき人間のように民衆の中をさ迷っている。ここにはある石があって、それに触れるや否や、ある楽器の弦が切れる時の音に似た音を立てる。人間たちの語るところによれば、アポロン[8]が羊の群をこの荒地で追い立てていて、彼の竪琴をこの石の上に置いたために、そこにこの旋律を残したとのことである。

おお、メランプよ！さ迷う神々は彼らの竪琴を石の上に置いた、しかし、どの神も……いかなる神もそれをそこに置き忘れることはなかった。私が岩穴の中で夜通し起きていた頃には時々思ったものだった、私は眠り込んだシベールの夢を不意に襲おうとしていると、そして、神々の母は夢想に裏切られて幾つかの秘密を失うだろうと。しかし私には決して、夜の息吹に溶け込む音しか、あるいは河の泡立ちのように不明瞭な言葉しか聞き取れなかった。

「おお、マカレーよ！[9]と私がその老いに付き添った偉大なキロン[10]がある日私に言った、我々は共に山のサントールだが、我々の実践は何と相反していることか！　ごらんの通り、私の日々の配慮はすべて植物の探索にあり、そして君はというと、牧神パンによって折られた葦の幾つかの断片を水の上や森の中で拾って唇に運んだあの死すべき人間たちに君は似ている。それ以来、あの死すべき人間たちは、神の捨てたこれらの破片の中に野生の精気を呼吸したがため、あるいはもしかしたらある密かな狂乱に取りつかれたため、荒地に足を踏み入れ、森の奥へと進み、水辺に沿って歩み、山に分け入る、不安に駆られある未知の意図に突き動かされて。遥か彼方のシティー[11]において風に愛された雌馬たちは君以上に荒々しくなく、夕暮に北風（アキロン）が去った時に一層悲しいということもない。君は神々を探し求めているのか、おお、マカレーよ！そして人間たちが、動物たちが、そして普遍的な火の諸原理がどこに由来するのか探し求めているのか？　しかし、万物の父である年老いたオセアン[12]がそれらの秘密を自らのうちに保持している、そして彼を取り巻くナンフたちが歌いながら彼の前で永遠の合唱隊を描いて、眠りのために半ば開いた彼の唇から逃れ出るかもしれないものを覆い隠そうとする。徳によって神々に触れた死すべき人間たちは、神々の手から民衆を魅了する竪琴を、あるいは彼らを富ませるための新しい種子を受け取ったのだが、神々の峻厳な口からは何も受け取ることはなかった。

「私が若かった頃、アポロンが私を植物へと向かわせて、葉脈から有益な汁を取り出すことを教えてくれた。

それ以来、私はこの山々の大きい住み処を忠実に守った、心安らぐことなく、しかし薬草の探索へと絶えず気持を振り向け、発見する効力を他の者に伝えて。君にはここからエタ山[13]の禿げた頂上が見えるだろうか？　あれはアルシッド[14]が己の火葬壇を築くために木々を剥ぎ取ったのだ。おお、マカレーよ！神々の子らである半神たちは薪の山の上に獅子たちの亡骸を横たえて、山々の頂で燃え尽きる！大地の毒が不死の神々から受け継いだ血を穢す！　そして我々は、ある女神に似た靄の懐の内に、ある大胆な死すべき者によって産み出されたサントールは、我々一族の父を雷撃したジュピテール[15]の加護から何を期待することができるだろうか？　神々の禿鷲は最初の人間を形作った職工の臓腑を永遠に引き裂く。おお、マカレーよ！人間たちとサントールたちは、不死の神々の特権を窃取した者たちを彼らの血の作者として認めている、だからあるいは、彼ら自身の外部で動いているものはすべて彼らから盗み取られたものに過ぎず、宙に舞う種子のように運命の強力な息吹によって遠くに運ばれた彼らの本性の軽い破片に過ぎない。広く語られているところによれば、エジェー[16]は、テゼー[17]の父であるが、海辺で岩の重しの下に、彼の息子がいつの日か自分の出生を知ることができるような思い出の品々や目印を隠した。嫉妬深い神々はこうした事の由来の証拠をどこかに葬り去ってしまった。しかしいったいどんな大洋の岸辺に彼らはそれらを覆う石を転がしたのか、おお、マカレーよ！」

以上のような知恵へと偉大なキロンは私を導いたのであった。極めて老け込んでいたが、かのサントールはその精神のうちに最も気高い談話を培っていた。未だに果敢な上半身がわずかに脇腹の上に崩れかかるかと見るまに、軽く身を傾けつつ起き上がるのだった、風を受けて悲嘆にくれる小楢のように、そして足取りの力強さは失われた歳月によってほとんど損なわれてはいなかった。かつてアポロンから受け継いだが、この神に返してしまった不滅の名残を彼はまだとどめているかのようであった。

私はというと、おお、メランプよ！沈みゆく星座のように穏やかに、私は老いの中に傾く。私は未だ十分な度

胸を持ち続けていて岩山の頂に到達することができる、そこに私はいつまでもとどまって、あるいは野生の不安な雲を眺め続け、あるいは地平線から雨を告げるイヤッド星団[18]、プレイヤッド星団[19]または大オリオン座[20]が昇って来るのを見つめ続ける。しかし私にはわかっている、私は水の上に浮かぶ雪のように忽ちのうちに小さくなり消えてなくなると、そして間もなく、大地の広大な懐の中を流れる河に混じりゆくだろうと。

【訳注】

『ル・サントール』*Le Centaure* にはギリシア・ローマ神話中の神々などの名が登場するが、この散文詩はあくまでもモーリス・ド・ゲラン Maurice de Guérin の作品であって神話の記述に常に忠実に従っているわけではない。そのため訳文中の固有名詞はフランス語表記――つまりゲランのテクストの表記――の読みをカタカナで近似的に表した。しかしテクストの基本的な理解に無益ではないと考えて、一般に流布している神話に関する書物（参考文献――以下「参」と略記――D）に依拠して簡単な注を付した。その際、フランス語表記の読み（F）の後に、ギリシア語（G）またはラテン語（L）表記に基づく読みを併記した。（ラテン名についてと同様、ギリシア名についてもローマ字転写のみ記した。なお、注の説明部分においては、大概ギリシア名のカタカナ表記を用いた。）

（1）サントール（*F.* Centaure）＝ケンタウロス（*G.* Kentauros; *L.* Centaurus）。上半身は人間、腰から下は馬の姿をした怪物で、一説によれば、ゼウスの正妻ヘーラーに恋したイクシーオーンが、最高神によって彼女に似た形に作られた雲と交わって生まれたとされる。主にテッサリアの山野に棲み、葡萄酒と女性を好み、生肉を食べ、野獣のような生活を送り、乱暴な行動によって人間たちを恐れさせた野蛮な種族。

（2）メランプ（*F.* Mélampe）＝メラムプース（*G.* Melampus）。「黒い足」を意味する名（生まれた時、母親によって日陰に置かれたが、足だけ日に当たったため黒くなったことに由来するという）を持つ予言者。子供の

頃、殺された蛇を手厚く火葬し、その子たちを養育したところ、やがて大きくなった蛇が眠る彼の耳を舌で清め、それ以来鳥獣の言葉を理解できるようになった。この能力によって未来を予見し占うこともできるようになり、自分の命を救ったり、子を授かる方法を人に教えたり、狂気にとりつかれた女たちに理性を取り戻させたりした。彼はまた病人を清めて健康にする術や薬草についての知識を獲得し、奇蹟を度々起した。――ケンタウロス族の者ではない。ゲランはウェルギリウスの『農耕詩』（第三歌、五五〇）に彼の名を見出したとされ、前行にはキロンの名も見られる。

（3）シベール（*F.* Cybèle）＝キュベレー（*G.* Kybele）。小アジア北部プリュギアの大地女神。ギリシアそしてローマにその崇拝が導入されて、自然の野生的で植物的な力を体現し、豊穣多産の女神として、動植物また人間や神々の繁殖においてユーピテルとともに絶大な権力を持った。

（4）アンフィトリット（*F.* Amphitrite）＝アムピトリーテー（*G.* Amphitrite）。海の老神ネーレウスの娘、海神ポセイドーンの后、海の女王。姉妹たちと浜辺で踊っていたところ、彼女はポセイドーンに見初められた。逃れて、遠い海の果てのアトラースの許へと匿まってもらいに行ったが、海豚に見つかり、彼女は海神の許に連れ戻された。

（5）パン（*F.* Pan）＝パーン（*G.* Pan）。アルカディアの神で、その名は「すべて」を意味する。上半身は毛深く、髯だらけの顔、雄山羊のような角と脚を持ち、山野を駆け巡り、羊や山羊の群れ、牧者たちを守った。シューリンクス笛を吹き、ニンフや美少年を追いかけ、また、突然現れて恐慌を引き起した。動物的な外見と満たされることのない愛によって、パーンは自然の飽くことを知らない繁殖力を表している。

（6）ナンフ（*F.* nymphe）＝ニュムペー（*G.* Nymphe）。ニンフのこと。海、川、水辺、木々、森、山、谷、岩、泉、洞窟など自然の様々な場所に棲む精・女神たちを指す総称。稀な美しさを持つ、裸のまたは半ば裸の若い女性

として描かれる。彼女たちは自然ばかりでなく人間をも肥沃にし、養い、再生させる力を持ち、予言することもできると考えられていた。また、歌い、踊り、神々ばかりでなく人間とも恋に落ち、不死ではないが、何千年も生きるとされていた。棲む場所によって分類され、それぞれに名を与えられた。

(7) オランプ山(*F.* le mont Olympe)=オリュムポス山(*G.* Olympos)。テッサリアとマケドニアの境に聳えるギリシアの最高峰で、その山頂にゼウスを始めとする神々が住むと考えられていた。そこでは会議が開かれて英雄や人間たちの、時には神々の運命についての議論が交され、また、人間の視線を遮る雲の上で神々は饗宴に打ち興じたとされる。鷲はゼウスの聖獣。

(8) アポロン(*F.* Apollon)=アポローン(*G.* Apollon)。オリュムポスの十二神の一人。ゼウスとレートーの子、アルテミスの双子の兄としてデーロス島で生まれた。誕生時に父から金の冠、竪琴、白鳥を繋いだ戦車を贈られた。神酒によって養われ数日で青年となった彼は、戦車に乗って極北の民族の所に赴き、一年を過ごした後ギリシアに戻り、デルポイに着いて大蛇を退治し、以後華やかな経歴が始まる。背が高く、輝くように美しい青年にはニンフたち、人間の女たち、少年らとの数々の恋物語があり、多数の子をなしたが、不幸な結末も多い。彼は家畜の守り神であり、自然や植物と親しく交わり、医療を施す一方、戦争・懲罰の神として人間に突然の死や疫病をもたらすと考えられ、予言・神託を司った。音楽家や詩人に霊感を与える芸術の守護神でもあり、ギリシア人にとって若さ・美・進歩の理想であった。

(9) マカレー(*F.* Macarée)=マカレウス(*G.* Makareus; *L.* Macareus)。ゲランがこの名を見つけたとされるオウィディウス作『変身物語』にはペーリオン山のマカレウスが登場し(巻十二、四五二。参D-1、D-6)、近代の諸版ではラピタイ(ラピテース族)の一人ということになっているが、あるフランス人翻訳者の従った版ではケンタウロスとして扱われている(参B-8、六四一頁)。

（10）キロン（*F*. Chiron.「シロン」とも。参D－9、二七二頁参照）＝ケイローン（*G*. Cheiron; *L*. Chiron）。クロノスが馬に姿を変えてオーケアノスの娘ピリュラーと交わったために、ケイローンは半人半馬のケンタウロスとして生まれた。乱暴で粗野な種族にあって珍しく賢明で知恵のある老人で、アポローンとアルテミスから医術や狩などを学んだ。薬草を栽培し、音楽、弓術、予言の術にも優れ、彼の棲むテッサリアのペーリオン山の洞窟には大勢の患者や教えを請う者が訪れた。アキレウスやイアーソーンを始めとする英雄たちを養育したことでも知られる。ヘーラクレースの毒矢に誤って当たり、自分の薬も効果がなく、不死身の彼は非常に苦しむが、神々の同意を得て不死をプロメーテウスに譲り、ようやく死ぬことができた。ゼウスは彼を夜空に上げ、射手座とした。

（11）シティー（*F*. la Scythie）＝スキュティア（*G*. Skythia）。黒海北岸のステップ地帯に遊牧民族スキタイ人の建設した国（今のクリミア半島に位置する）。

（12）オセアン（*F*. Océan）＝オーケアノス（*G*. Okeanos）。始原的な基本要素として世界の創造を司ったオーケアノスは、天空ウーラノスと大地ガイアの息子。水の神格化であり、約三千の河が注ぐ父なる河として、そこではすべてが創造され消滅する巨大な大河として、大地を取り巻いている。妻テーテュースとの間に無数の娘たち「オーケアニデス」を儲けた。後世の芸術作品では、緑のひげを生やし、豊饒の印である雄牛の角を持つ老人として描かれている。

（13）エタ山（*F*. le mont Œta）＝オイテー（*G*. Oite）またはオイタ（*G*. Oita）。ギリシア中央部の山。標高二千百メートル超。他の高山同様、ゼウスが屯したとされる。

（14）アルシッド（*F*. Alcide）＝アルケイデース（*G*. Alkeides; *L*. Alcides）。ヘーラクレース（*G*. Herakles; *L*. Hercules; *F*. Hercule）の幾つかある名のうちの一つ。ペルセウスとアンドロメダーの長子であるアルカイオス

（*G.* Alkaios; *F.* Alcée）の子孫であることによる。ヘーラクレースはギリシア神話中最大の英雄で、多くの武勇伝が伝わっている。ネッソス（ケンタウロス族の一人）の血の塗られた下着を着た彼は、その血に混じるヒュドラー（水蛇）の毒に侵されて、肌に吸い付いた下着を取ろうとすると肉まで引き剥がさなければならない。毒が全身に回り、死の間近なことを知ったヘーラクレースはその身をオイテー山の頂に運ばせ、薪の山を作らせ、火を点けさせて、火葬壇の火に身を焼いて自ら焼け死んだとされる。――彼は十八歳の時、キタイローン山（アッティカとボイオーティアの間に位置する山脈）に棲むライオンを退治。また後にはネメアの谷に棲み人や家畜に大きな被害を与えていたライオン、彼の弓矢や棍棒をもってしても倒せない不死身の猛獣を素手で締め殺した。彼はライオンの皮を剥いで着たが、これはどんな矢も射通せなかったという。

（15）ジュピテール（*F.* Jupiter）＝ユーピテル（*L.* Jup(p)iter）。古代ローマの最大の神、天空と大地の最高神。雲のかかる高い山々の峰に住み、光、天候、雷鳴、稲妻など自然の諸要素を司る神格だが、中央集権化されるローマ国家の必要に応じて宗教的次元ばかりでなく政治的次元においても統一的な力を揮うようになり、戦争・勝利に関与し、法・条約・誓言等を保証し、人間社会の秩序の維持を掌握することとなった。後にギリシアから導入されたゼウスと同一視されるようになって、一段と多くの属性や権限が与えられた。

ゼウスの后である女神ヘーラーを誘惑しようとしたラピテース族の王イクシーオーンは、ゼウスによって彼女の姿に似せて作られた雲と交わった。その結果生まれたのがケンタウロスの一族だとされる。義理の父との約束を破りそして殺したイクシーオーンは、彼の罪を浄めてくれたゼウスに対しても忘恩の振舞に及んだわけで、怒ったゼウスは彼を回り続けて止まることのない火の車輪に縛りつけさせた。かつてゼウスから天上のアムブロシアーを味わわせてもらって不死になっていたイクシーオーンは、こうして地獄のタルタロスで永劫の罰から逃れることができない。

（16）エジェー（*F.* Égée）＝アイゲウス（*G.* Aigeus）。アテーナイ王パンディーオーンの四人の息子の一人。王の死後、取り返した国を兄弟四人で分け合い治めたが、王位に就いたのはアイゲウスであった。子のテーセウスがミーノータウロスを退治してクレーテー島から帰還する際に、息子が死んだものと誤って考え、絶望から海に身を投げた、それ以来この海には彼の名が付けられた（「アイガイア（エーゲ）海」）とされる。

（17）テゼー（*F.* Thésée）＝テーセウス（*G.* Theseus）。アテーナイを中心とするアッティカ地方の最大の英雄の一人。一般にアテーナイの王アイゲウスの子と言われているが、ポセイドーンの子とする説もある。アイゲウスがデルポイからの帰途、トロイゼーンの王のピッテウス宅で酒に酔って寝ている間に、この王の娘アイトラーが孕んだ。彼は帰国する時に、もし男児が生まれたなら父の名を言わずに養育するようにと、そして、ある岩の下に自分の剣とサンダルを隠しておいたが、子が岩を持ち上げてそれらを取り出すことができるまでに強く育ったならば初めて彼の出自を打ち明けるようにとアイトラーに言い残した。十六歳になった時、テーセウスは岩を持ち上げ、証拠の品とともに父を尋ねてアテーナイに向けて旅に出る。既に幼少時から目覚ましく勇敢で冷静であった彼は、以後、野盗や猛牛やミーノータウロスなどの退治、様々な困難の克服、数々の冒険を経て、父の死後、王位に就いた。その後も闘いは尽きず、多くの英雄譚が伝わっている。

（18）イヤッド星団（*F.* les hyades）＝ヒュアデス（*G.* Hyades）。牡牛座の頭部を形成する一群の七つ星。一般にアトラースとオーケアノスの娘の一人を両親とする娘たちだとされるが、その数も二人から七人と説によって異なる。彼女たちは元はニンフで、ディオニューソスを養育した、これに報いるためゼウスが彼女たちを星座間に置いた。別の説によると、彼女たちは兄弟ヒュアースの死を嘆いて自殺したため、ゼウスが憐れんで星に変えたが、なおも涙を流し続けた――これらの星の出が雨を告げる、雨季に当る――ということから、「ヒュアデス（雨を降らせる女たち）」と名づけられたとされる。

(19) プレイヤッド星団(*F.* les pléiades)=プレ(ー)イアデス(*G.* Pleïades)。ヒュアデス星団同様、牡牛座にある星団で、七つ星(和名「昴」=六連星)。一般的にはアトラースとプレ(ー)イオネーの七人の娘たちを指す。一説によれば、彼女たちが母とともにボイオーティアにあった時、恋心を抱いたオーリーオーンに追いかけられ、何年間も(五年間)逃げ続けた果てに鳩に変えられてしまい、それを憐れんだゼウスが彼女たちを空に上げて星にした、という。星に変えられたのは、他の説によれば、彼女たちがゼウスによって父アトラースに課された天空を支えるという罰に絶望して自殺したためとも、また、兄弟のヒュアースが毒蛇に咬まれて死んだ時、嘆いて自殺したヒュアデス姉妹の後を追って彼女たちも悲しみ死んだためとも言われる。「プレ(ー)イアデス」は「航海する」を意味するギリシア語から派生し、この星団は春五月に現れて航海に適した季節の到来を船乗りに告げるとされる。(この名前はまた「鳩の小さい群れ」を意味するギリシア語に由来するという説もある。)

(20) 大オリオン座(*F.* le grand Orion)=オー(ア)リーオーン(*G.* O(a)rion)。大変に美しくて力が強い巨人の狩人。ボイオーティアの百姓ヒュリエウスの子とも、海神ポセイドーンの子とも、また大地女神ガイアの子とも言われる。彼の死については諸説あるが、最も一般的なのは、女神アルテミスを犯そうとして彼女の送った蠍に刺されて死んだという説で、蠍とともに彼もまた星座に変えられた。こうして夜空においても逃げ続けるプレ(ー)イアデスを追いかけるオーリーオーンは、同時に蠍から永遠に遁れようとするが、いずれもむしろ星座の位置から出た物語だと考えられている。

【訳者解題】

一八一〇年八月四日生まれのモーリス・ド・ゲラン Maurice de Guérin は、二九回目の誕生日を待たずに一八三九

年七月一九日に短い生涯を閉じた。生前ほとんど日の目を見ることのなかった彼の著作のうち、その後代表的な作品と見なされることになる『ル・サントール』*Le Centaure*（制作年をベルナール・ダルクールは一八三五年と推定している。参A－3、第一巻、二九四頁）が、『グロキュス』*Glaucus*（韻文詩、ギリシア神話のグラウコスに材を得たもの）と、更にバルベー・ドールヴィイ Barbey d'Aurevilly 宛の手紙の抜粋とともに、『両世界評論誌』*Revue des Deux Mondes* に、ジョルジュ・サンド George Sand によって紹介されたのが死の翌年、一八四〇年五月のことであった。だが、彼の最初の作品集がトレビュシヤン Trebutien によって、それも「家族の同意を得て」（つまり検閲されて）出版された（参A－1）のが、死後二〇年以上経った一八六一年であった。発見、歓迎、忘却、再評価と浮沈を繰り返しつつ、モーリスの作品は長い時間をかけて深く浸透してゆく。

一般的な人気の浮き沈みはともかくとして、彼の散文詩を高く評価する声は従来少なくなかった。ジョルジュ・サンドは『ル・サントール』を小さな傑作とし、その美点、形式の新しさ、文やイメージや表現などの独創性を認めるには二回、さらに三回と読むことを勧めている（参A－1、四六五頁）。トレビュシヤン編集の著作集に序文を寄せたサント＝ブーヴはこの散文詩を「古代大理石の巨大な断片」に譬えた（参A－1、Ⅶ頁）。以後の作品集の序においても、例えばレミ・ド・グールモンは『ル・サントール』をフランス語で書かれた最も美しく最も貴重なページの中に加えるべきだと讃え（参A－2、五頁）、例えばフランソワ・モーリヤックはこれを『ラ・バカント』（*La Bacchante*）とともにフランス文学の最も美しい散文詩であると見なした（参A－4、一一頁）。また、アルベール・ベガンはこの散文をフランス文学における真にディオニューソス的な数少ない作品のうちの一つと考えた（参C－3、三五〇頁）。ポール・クローデルは、シャトーブリアン以来途絶えることなく続いてランボーに至るフランスの散文の流れの中にモーリス・ド・ゲランを位置付け（参C－6、五一八頁）、そして『地獄の一季節』の詩人とともに『ル・サントール』の詩人を、北斎の絵の中の砕ける波から飛び散る「驚異の鳥」に譬えた（参C－6、四四頁）。

最後に、彼の一番の理解者であったバルベー・ドールヴィイ――モーリス・ド・ゲランのコレージュ・スタニスラースにおける学友であり、二十代半ばのパリでの文学修業・放浪時代の無二の友であり、彼のために『備忘録』を書き、彼の死後も長年にわたって詩人の著作集を編むことを計画しながら、トレビュシヤンとの仲違いのために、このカーンの司書によって彼の作品集が公刊された時その名前すら言及されなかった――の評価。この小説家・批評家によれば、ゲランの韻文詩は下書きに過ぎず、散文こそが完成した詩である。散文詩こそが入念に彫られ、凹凸深く刻まれ、天の精気を帯び、透き通り、赤く染まる大理石であって、まるで天に舞い上がる軽やかな雲のようだ、と形容される(トレビュシヤン宛一八五三年一〇月一一日の手紙。参C－7、第三巻、二五二頁)。まだ絶交していない頃、バルベー・ドールヴィイはカーンの友人に向かってそのように、彫琢された可塑的な美しさ、硬質でありながら軽やかな質感と透明な彩りを持つゲランの散文詩について語っている。

モーリス・ド・ゲランの『ル・サントール』の文学史上に果した役割や影響はどのようなものであっただろうか。ピエール・アルブーイはフランス文学における神話を論じた著書の中で次のように述べている。フランス詩はロマン主義とともに中世へと向かったが、一八四〇年代に古代ギリシアへと立ち戻った。異教的な文学の流行の中にあって、モーリス・ド・ゲランは、人類の歴史でも哲学でも教義でもない、個人的な輪廻を語る階調豊かな散文で一つの新しい範を示した。半人半馬の神話的人物は、その複雑な性格のうちに、彼の日記『緑のノート』*Le Cahier vert* に表明されている作者の内面生活や動揺を反映している。このような神話の個人的な扱いは、やがて来る象徴派の手法を告げ(例えばアンドレ・ジッドは彼自身の問題を扱うためにプロメーテウスやオイディプースなどのギリシア神話の人物を利用した)、また彼の散文詩は「サントール」のテーマの源となって、その影響はルコント・ド・リールを始めとする高踏派を通じて二十世紀初頭にまで至る(参C－4、九〇－九二頁)。

『ル・サントール』は半人半馬として生まれた者の生の消長の物語で、対話の体裁を取りながらも、むしろほとん

ど唯一の声によって語られる（参B－4、XIII頁）。主人公は洞窟の中で誕生し、そこで幼年時代を過ごすが、やがて外の世界を見出し、青春の奔走と自然の中での高揚感を体験、神々を発見し、師に出会い、知恵に触れ、哲学的な苦悩を経験し、果てに老いを迎える。これは一つの人生の変遷を、神話的な世界に置き換えて語った告白として考えられるが、ここにはゲランが自己について抱いていた鋭い意識が窺われる。サントールとは走るための馬の脚と、考えるための人間の頭を持つ者である。内に漲る野性のエネルギーの緊張と奔出を運ぶ下半身を、首をねじ曲げて観察の目と内省の精神を持って顧みる時、一つの存在の中で二つの対立する内なる力が激しくせめぎ合う――サントールとは二重性を己れの本質として生きる者である（参B－6参照）。青春期の疾駆のさ中にも、一旦立ち止まれば、意識は体の中を巡り始める。横溢する生の躍動と内省する自我との葛藤。そのようなサントールを散文詩に結晶させようと試みたモーリス・ド・ゲランが、やがて自らを定義して«Heautontimorouménos»――己れの上に反転し、自らの胸を嚙む者――と自称した（バルベー・ドールヴィイ宛一八三八年五月二二日の手紙――参A－3、第二巻、三五一頁。参A－6、二三五頁――の中で、即ち『悪の華』を一八五七年に上梓したボードレールより早く）のは必然的なことであった。そして、『ル・サントール』で描かれた一個の存在における人と馬との共存・二重性は、次に執筆が計画されていた*L'Hermaphrodite*（参A－6、二三五頁。参C－7、第六巻、七五頁）における一人の人間の中の男と女の両性具有・二重性に引き継がれる筈だったが、これはモーリスの死のために実現しなかった。

散文詩『ル・サントール』は老いたマカレーがメランプに専ら自分の生きてきた生を語るという形を取っていて、メランプの反応はマカレーの科白の中に反響するのが時として認められるが、具体的な言葉としては一切書かれていない。そしてマカレーは師キロンの言辞を引用するが、この二人の口調に特に違いは感じられない。確かに、先ずは、キロンは内省的で瞑想的な知恵を体現し、マカレーは限界を知らない荒々しい生命力を体現しているということなのだが、老いたマカレーが老いたキロンを引用する時、二人の精神的相貌は、声は、二人を描き分ける具体的・外面

的描写が無いだけに不思議に重なり合ってくる。古い世代から新しい世代へと語り継がれる言説があり、キロンの体験とマカレーの体験は呼応し合い、二人が自らを「私」《je》と言う時も、二つの「私」は響き合い、溶け合う。この詩は対話にならずに、全篇を通じてほとんど単一の声しか聞こえてこない。それ故、キロンの《je》とマカレーの《je》とを例えば「わし」と「わたし」のように訳し分けたり、二人の語りの調子を変えたりなどは敢えてしなかった。ゲランのテクストの言葉の流れにできるだけ従うように努めた。

翻訳はマルク・フュマロリ版の作品集(参A－6)に拠り、適宜ベルナール・ダルクール編の全集(参A－3)を参照した。

【参考文献】

A. 翻訳または解題に利用・参照したゲランの作品集

1. Maurice de GUÉRIN, *Journal, lettres et poèmes*, publiés avec l'assentiment de sa famille par G. S. Trebutien, et précédés d'une étude biographique et littéraire par M. Sainte-Beuve, Paris, Didier, 1863 (4e edition).
2. —, *Le Centaure, La Bacchante, Glaucus, Promenade à travers la lande, Sainte Thérèse, Journal, Lettres*, notice de Remy de Gourmont, Paris, Mercure de France, 1923.
3. —, *Œuvres complètes*, texte établi et présenté par Bernard d'Harcourt, Paris, Les Belles Lettres, 1947, 2vol.
4. —, *Le Centaure, La Bacchante*, précédés de «Le génie de Maurice de Guérin» par Charles Du Bos, préface de François Mauriac, Paris, Falaize, 1950.
5. —, *Le Cahier vert*, texte établi d'après le manuscrit autographe, présenté et commenté par Claude Gély, Paris, Klincksieck, 1983.

6. ―, *Poésie*, édition présentée, établie et annotée par Marc Fumaroli, Paris, Gallimard, «Poésie», 1984.

B. 解題等に利用・参考にしたゲランについての研究書

1. Abel LEFRANC, *Maurice de Guérin d'après des documents inédits*, Paris, Honoré Champion, 1910.
2. Ernest ZYROMSKI, *Maurice de Guérin*, Paris, A. Colin, 1921.
3. E. DECAHORS, *Maurice de Guérin, essai de biographie psychologique*, Paris, Bloud et Gay, 1932.
4. Bernard d'HARCOURT, *Maurice de Guérin et le poème en prose*, Paris, Les Belles Lettres, 1932.
5. Maya SCHÄRER-NUSSBERGER, *Maurice de Guérin, l'errance et la demeure*, Paris, Corti, 1965.
6. Pierre MOREAU, *Maurice de Guérin ou les métamorphoses d'un Centaure*, Paris, Archives des Lettres modernes, n°60, 1965.
7. Charles DU BOS, *Du spirituel dans l'ordre littéraire*, Paris, Corti, 1967.
8. Colloque international sur les GUÉRIN, *Lectures Guériniennes*, textes recueillis et présentés par Claude GÉLY, Université de Montpellier, 1989.
9. Marie-Catherine HUET-BRICHARD, *Maurice de Guérin, imaginaire et écriture*, Paris, Lettres Modernes, 1993.
10. Marie-Catherine HUET-BRICHARD (textes réunis et présentés par), *Maurice de Guérin et le romantisme*, Toulouse, Presses Universitaires du Mirail, 2000.

C. ゲランに関して利用した他の文献

1. Jean-Pierre RICHARD, *Études sur le romantisme*, Paris, Le Seuil, 1970.
2. Paul BÉNICHOU, *Le Temps des prophètes*, Paris, Gallimard, 1977.
3. Albert BÉGUIN, *L'Âme romantique et le rêve*, Paris, Corti, 1984.

4. Pierre ALBOUY, *Mythes et mythologies dans la littérature française*, Paris, A. Colin, 1985.
5. Pierre BRUNEL (dir.), *Dictionnaire des mythes littéraires*, Paris, Le Rocher, 1988.
6. Paul CLAUDEL, *Œuvres en prose*, Paris, Gallimard, «la Pléiade», 1989.
7. BARBEY D'AUREVILLY, *Correspondance générale*, Paris, Les Belles Lettres, 1980-1989, 9vol.

D. ギリシア・ローマ神話に関連して訳注などに利用したもの

1. OVIDE, *Les Métamorphoses*, traduction, introduction et notes par J. Chamonard, Paris, Garnier-Flammarion, 1966.
2. Pierre GRIMAL, *Dictionnaire de la mythologie grecque et romaine*, Paris, Presses Universitaires de France, 1986.
3. Robert GRAVES, *Les Mythes grecs*, traduit de l'anglais par M. Hafez, Paris, Hachette/Pluriel, 1987, 2vol.
4. Joël SCHMIDT, *Dictionnaire de la mythologie grecque et romaine*, Paris, Larousse, «Références», 1991.
5. 呉茂一『ギリシア神話』、新潮社、一九七〇年
6. オウィディウス『変身物語』(上・下)、中村善也訳、岩波文庫、一九九七年
7. 高津春繁『ギリシア・ローマ神話辞典』、岩波書店、一九九九年
8. Pierre LAROUSSE, *Grand Dictionnaire universel du XIXe siècle*, Nîmes, Lacour, 1990-1992, 28vol, réimpression de l'édition de 1866-1876.
9. Pierre FOUCHÉ, *Traité de prononciation française*, Paris, Klincksieck, 1959.